

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520110

研究課題名(和文) 英国における児童美術教育の成立と自然観の変容

研究課題名(英文) The Formation of Art Education for Children and the Transformation of the Conception of Nature in England

研究代表者

要 真理子(KANAME, Mariko)

大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・招へい准教授

研究者番号：40420426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ジャン＝ジャック・ルソー以降の児童教育では、この自然性が既存の文化・社会の枠組みに貢献する限りで、という制約のなかで、子どもの自然性(純粹無垢な感受性・創造性)を育むことが重視されて来た。本研究課題では、近代英国の児童美術教育をいっそう大きな理論的文脈のもとで読み直し、児童の感受性・創造性が他の諸概念・諸実践(自然観、原始美術、未開美術、近代美術)と連関して着想されていた点に注目し、この連関を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Ever since Jean-Jacques Rousseau, children's education has emphasized the importance of developing the potentials of children (e.g. fostering "natural" sensibilities or creativity) so they may contribute to a society and its culture. Reconsidering art education for children in modern England within a larger theoretical context, this research project clarified the extent to which ideas regarding children's sensibility/creativity engaged with other ideas and practices, such as conceptions of nature, savageness, primitive art, and modern art.

研究分野：人文学：美学・美術史

キーワード：英国 児童美術教育 自然観 プリミティヴィズム モダンアート 創造性 モダニズム 国際研究者  
交流

1. 研究開始当初の背景

近代ヨーロッパの児童のための美術教育の実践を支えている美学思想、ならびにその歴史的文脈への研究代表者の関心は、おもに Jean-Jacques Rousseau に始まるとされる西洋近代の児童教育思想が、その背後に自然（子ども、ならびにその感受性・創造性）の馴致という性格をもっている点に着目したことに由来する。事実、Rousseau は、『エミール』（1762）第一巻を「神はあらゆる事物を善なるものにつくり給うが、人間が手を加えて、悪くしている」という言葉から始め、続けて児童を自然になぞらえつつ、その純真無垢さを強調し、それに即した教育法の必要性を主張した。このように児童と自然を同一視する Rousseau の教育観は、J. H. Pestalozzi、F. Fröbel といったヨーロッパの児童教育の基礎を築いた先駆者にも継承され、とくに美術教育という点では、それまでの職業訓練としての徒弟制度や美術アカデミーでの専門教育とは異なる教育形態、すなわち児童が生得的に備えている自然性（感受性・創造性）を育みつつ、しかし同時にこの自然性を人間社会へと適応させる訓練も組み込まれたシステムの必要性が認識されたのである（Cf. Arthur D. Efland, *A History of Art Education*, University of London Press, 1990; ステュアート・マクドナルド、中山修一・織田芳人訳、『美術教育の歴史と哲学』、玉川大学出版部、1990）。それゆえまず、近代の児童を対象とした美術教育の出発点にある、こうした児童と自然の同一視とその人間社会との調和的な仲裁という考え方を明らかにするためには、これまで行われてきたような具体的・個別的な教育実践内容の掘り起こしだけでなく、その背景にある美学的な思想の再検討が必要であると考えた。

その一方で、上に示唆したように、近代国家において児童教育が社会の必要性を満たすために着想されたことも事実であり、とりわけ英国では産業革命以降、デザイン改革者 H. Cole や R. Redgrave らによって児童の職業訓練的なデザイン教育が推進された。この運動にとって、1851 年のロンドン万博は重要なきっかけとなっており、そこで彼らは英国の美術・工芸、デザインが他のヨーロッパ諸国から大きく立ち遅れている痛感したとされる。こうした出発点をもつことから、国家的な支援を得た彼らの計画は、実用的なデザイン技能を習得するための教育プログラム、ならびにその実施の場としてのデザイン学校や美術館の設立へと展開していった。このような社会背景は、Rousseau の提唱した教育理念、ならびに彼の継承者である先の Pestalozzi や Fröbel らドイツの教育学者が考案した児童を対象とする美術教育が、とりわけ（アメリカを除いては）英国において、社会的な要請と最も緊密に結びつく結果をもたらす。つまり、自然と児童の同一視を前提とする大陸の美術教育は、英米圏へと移入

されるなかで、その産業的効率も重視されるようになったのである。英国におけるこうした産業と教育との関係の特殊性は、すでに研究代表者が、20 世紀初頭にロンドンで事業展開したデザイン工房に関する研究の過程で明らかにしたものである（要、「虚飾の美をめぐる考察」『フィロカリヤ』21 号、2004 所収）。

児童教育と社会・産業的な要請との関連については、例えば Pestalozzi の方法論を英国の美術教育界に紹介した H. Spencer が、その功利主義的な思想で知られる一方で、熱心な進化論者でもあり、児童の発達と人類の歴史を並行視する従来の児童教育を推進してきた考え方に加えて、児童の教育がそのまま人間社会の進化に直結するという独自の思想をもっていたことも挙げられる（*First Principles*, 1862）。つまり、児童に対して施された教育は、ただ対象児童の発達を促すだけでなく、そのまま次世代の児童に引き継がれ、社会全体の利益につながると考えたのである。このアナロジーは、とりわけ 19 世紀後半になって多く言及されるようになり、児童と未開を同一視する考え方を美術教育にもたらした。例えば、英国の心理学者 J. Sully は、「周知の通り、人類の最も低級な民族は動物界にほぼ近似したところにある。これと同じことは文明化された民族の幼児にもあてはまる」（*Studies of Childhood*, 1896）と述べた。やがて、児童と人類史の初期段階と「未開」民族とに共通するこの状態は、「プリミティヴ（primitive）」という形容詞で包括されるようになった。実際、当時の美術理論によれば、児童の図画・造形上の制作物は、プリミティヴなものとして考えられ（R. Fry, “Bushman Paintings”, 1910）これはドイツにおいて児童の創造性が神性との関連で論じられがちであることとは対照的である。

それゆえ、20 世紀に登場したモダンアートの一部、すなわち H. Matisse や P. Gauguin に代表される近代画家たちの作品が「プリミティヴ」と形容されたとき（大久保、『プリミティヴィズムとプリミティヴィズム』、三元社、2009）彼らの着想法と制作が児童の美術教育に影響を与えたことは必然的であった（Cf. R. Schiff, “From Primitivist Phylogeny to Formalist Ontogeny” in *Discovering Child Art*, Princeton University Press, 1998, pp.157-200）。事実、1910 年と 1912 年にポスト印象派展を組織し、上記のモダンアートを英国に紹介した美術批評家 R. Fry は、児童画を人類の発達の初期段階になぞらえている。ただし、こうしたアナロジーは複雑な構成をもっており、Fry の批評においても、児童美術は独自の性格をもつとされている（要、「ロジャー・フライによる子どもの制作物へのまなざし」、2011）。したがって、こうした錯綜したアナロジーの解明も本研究の重要な目的である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀前半から20世紀前半に至る英国の美術教育、とりわけ造形・描画教育の展開を、個別の教育実践ではなく、その方法論を支えていた理論的テキストからたどり、現代にも及んでいる西洋の自然観の転換と照合しつつ美学的に検証することにある。ルソー以降の教育理念においては、児童の自然性（豊かな感受性・創造性、純粹無垢さ）を保つことが重視される。その一方で、この自然性を既存の社会に貢献できるものに人間化することも引き続き教育の役割である。近代教育が抱えるこうした逆説が具体的な教育実践にどのように反映していったのかを、この逆説が最も顕著に現れると予想される美術教育において明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究には、研究代表者（要）と研究分担者（大久保・前田）の三名が従事した。児童美術教育と近現代に大きな変化を遂げた自然観との理論的な連関については前田、近代の植民地主義下での原始美術および未開美術とのイデオロジカルな連関については大久保、英国近代絵画との批評的な連関ならびに分担者の研究成果を合わせて集約・総合する作業は研究代表者が担当した。

- (1) 平成24年度は、本研究課題の基盤となる国内外における関連資料の所在を確認し、資料収集を行った。具体的には、以下の通り。

研究代表者が国内で入手可能な英国の美術教育者 (M. Richardson, H. Spencer, J. Mill) の手になる一次文献ならびに先行研究書（いずれも再版）を購入した上で、分担者前田とともに、8月と2月にケンブリッジ大学附属図書館、キングズカレッジ附属モダンアーカイヴを中心として関連文献の複写を行った。

研究分担者大久保は、「プリミティヴィズム」の視点から民族芸術の実見調査から新たな問題を掘り起こすことを目的としてNYメトロポリタン美術館の民族芸術展示を中心に調査し、ブルックリン美術館の民族芸術展示との比較を行った。

7月23日から25日までポルトガルのアヴェイロ大学で“2<sup>nd</sup> International Conference Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education: Creative processes and childhood-oriented cultural discourses”が開催され、研究代表者と分担者前田が研究報告を行った。両報告は、本研究課題の準備段階で構想されたものであり、この国際学会は研究の方向性を確認する上で重要

な機会となった。

- (2) 平成25年度は、前年度に引き続き現地調査、資料収集を中心に行った。具体的には以下の通り。

研究代表者が英国滞在中、ノリッジ（イースト・アングリア大学）を拠点としてイースト・アングリア大学附属図書館、コートールド研究所附属図書館（ロンドン）で、日本国内では入手不可能な先行研究を含むアーカイヴズ資料の閲覧および手書きによる転記、複写（スキャン、コピー）を行った。

研究代表者と分担者前田は、7月、ポーランド、クラクフで開催された第19回国際美学会議で各自口頭発表を行い、9月にはイースト・アングリア大学で共同による招へい講演を行った。同時期にサセックス大学で開催された第15回モダニズム学会にも参加した。

大久保は、夏にロンドン・パリにて調査を行い、世紀転換期のプリミティヴ概念をロンドンとパリの芸術的様相と言説に基づく分析に着手し、とりわけ19世紀後半からの世界博覧会の開催や民族学博物館の解説という社会現象を取り上げ、それらを取り巻くプリミティヴ概念の変容と当時の児童教育概念のリンクを考察した。

代表者と分担者は、国内の小規模な研究会だけでなく、海外滞在時にも意見交換する機会をもち、相互の進捗状況を報告しつつ資料整理と情報共有に務めた。同年度後半は、収集した資料の読解に専念した。

- (3) 最終年度は、これまでの研究の進捗を受けて、今まで日本では紹介される機会が少なかった19世紀から20世紀にかけての英国における美術教育に関係した人々の一次資料を追加収集するとともに、成果報告の一環として公開研究会を企画・実施した。

とくに、英国図書館、リーズ大学附属図書館において集中的な収集を実施した他、ロンドン大学附属教育研究所（IOE）とバーミンガム市立大学附属マリオン・リチャードソンアーカイヴで閲覧・複写の作業を行った。

10月に大阪大学で国際ワークショップ&レクチャーを企画・実施した。詳細は、研究成果の項目で述べる。

## 4. 研究成果

- (1) 2012年7月23日にアヴェイロ大学で実施された国際会議にて、研究代表者と分担者前田が本研究課題の基礎となる報告を行った。
- (2) 2012年8月11日滋賀県近代美術館と

2013年3月1日ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ(SHIZENGAKUプロジェクト)において、代表者は自然観に関わる招へい講演を行った。本講演は、西洋と日本の自然観および美意識を比較する内容のもので、最終年度の国際ワークショップ&レクチャーの構想に結びつくものとなった。

- (3) 2014年10月30日に大阪大学で国際ワークショップ&レクチャー「自然を教育する？」と冠し、コンテンポラリーダンスの専門家エリザベート・ダムールと能楽研究者中尾薫(大阪大学)に講演を依頼するとともに、公開ワークショップを本科研主催で実施した。この試みには一般からの参加者も含めて約30名が参加し、これまでの研究成果を報告する貴重な機会となった。
- (4) 2014年12月に刊行された『ロンドン - アートとテクノロジー - 』に大久保が本研究課題の成果の一環として「プリミティヴィズム前史」を分担執筆した。
- (5) 引き続き、研究代表者と分担者は、この研究全体を通じて収集した資料のうち、とくに日本での研究が進んでいないものを選別して訳出し、広くその内容を発表することを確認した。平成28年度に図書としての刊行を目指し、現在複数の出版社に出版企画を打診中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11件)

要 真理子、「美的紐帯を創出する映像ワークショップ——"remoscope"の可能性——」、「成安造形大学紀要」第6号、2015、15-28

要 真理子、「イギリス・モダニズムに見る波と戦争の風景——光琳《松島図屏風》との比較検討から——」、「立命館言語文化研究」第26巻3号、2015、45-53

要 真理子、前田 茂、「ヴァージニア・ウルフと映画表現における『時間感覚』の発見」、大阪大学大学院文学研究科美学研究室紀要『美学研究』第9号、査読有、2015、掲載確定

大久保 恭子、「マティスの切り紙絵における原画と複製」『美術フォーラム 21』第31号、2015、掲載確定

大久保 恭子、「20世紀フランス美術における黒人アフリカ彫刻の受容——アンリ・マティスを中心に——」公益社団法人日本彫刻学会『アート・ライブラリー』第16号、2015、15-20

Mariko Kaname, Shigeru Maeda, On Incompatible Aspects in the Style of Japanese Design: Referring to A New Development in Phenomenology, *Proceedings of The 9th International Conference on Design History and Studies*, 査読有, 2014, 157-161

ジャレ・エルツェン著 / 要真理子訳「美学か美か：自然と芸術における形式と意味」『立命館言語文化研究』第25巻1号、2013、1-8

Mariko Kaname, "Remarks on 'Emptiness' or 'Intervals' in Painting: Modernism and Orientalism" *The challenge of the object: 33rd congress of the International Committee of the History of Art/ CIHA 2012*, Nürnberg. Germanisches Nationalmuseum. 査読有, 2013, 1287-1290

クリスティーナ・ヴィルコシェフスカ著 / 要 真理子訳「風景と環境」『立命館言語文化研究』第24巻3号、2013、79-88.

Shigeru Maeda, 'How to estimate children's creativities authentically in "Artistic Workshop"?', *Proceedings of 2nd International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education*, 査読有, 2012, 147-152

Mariko Kaname, 'Considering Education of Children's Drawings in the 19th century to 20th century in England', *Proceedings of 2nd International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education*, 査読有, 2012, 153-157

[学会発表](計 15件)

Mariko Kaname, Tsuyoshi Tamura and Shoko Sumida, Landscape Documentation: collecting "personal" landscapes for sharing within communities, Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014, September 20 2014, Tsukuba University

大久保 恭子、「色彩の解放 - モネからセザンヌまで - 」、平成26年度日本色彩学会関西支部大会・支部総会、2015年2月21日、関西外国語大学、招へい講演

要 真理子、伊藤 京子、「画像を介したコ

コミュニケーション：教育支援システムに向けた実験的検討」ヒューマンインタフェース学会シンポジウム 2014, 2014 年 9 月 10 日、京都工芸繊維大学

Mariko Kaname, Shigeru Maeda, On Incompatible Aspects in the Style of Japanese Design: Referring to A New Development in Phenomenology, The 9th International Conference on Design History and Studies, July 9<sup>th</sup> 2014, Aveiro University, Portugal

前田 茂、「マンガにおける間」ミニシンポジウム「芸術における間」(招待講演) 2013 年 11 月 30 日、イロリムラプチホール

要 真理子、「イギリスモダニズムに見る都市の風景」、国際フォーラム「風景のヴァンギャルド、風景のポストモダン」(招待講演)、2013 年 10 月 19 日、立命館大学

Shigeru Maeda, Mariko Kaname, “Cinema as Aesthetic Leveller: Modernist Literature, Modern Epistemology and Japanese Sensibility”, World Art Research Seminar (招待講演), September 4, 2013, University of East Anglia, UK

Shigeru Maeda, “Pilgrimages’ to Scenes from Anime: Beyond the Consumption of Mass Culture”, 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, July 23, 2013, Jagiellonian University, Poland.

Mariko Kaname, “Bloomsbury’s vision: considering ‘The Cinema (1926)’ by Virginia Woolf”, 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, July 24, 2013, Jagiellonian University, Poland.

Mariko Kaname, “Considering How to Represent an Aesthetic Attitude toward Nature”, The 2<sup>nd</sup> Symposium on SHIZENGAKE (招待講演), March 1, 2013, Goldsmiths, University of London, UK

前田茂、「風景の認識から実践へ——現象学的美学を参照しつつ」第 3 回「21 世紀の風景論」研究会、2013 年 1 月 31 日、立命館大学

要真理子、「自然に対する美意識の表象化をめぐる」、「SHIZENGAKE」第一回シンポジウム(招待講演) 2012 年 8 月

11 日、滋賀県立近代美術館

Shigeru Maeda, ‘How to estimate children’s creativities authentically in “Artistic Workshop”’, 2<sup>nd</sup> International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education, July 25, 2012, Aveiro University, Portugal.

Mariko Kaname, ‘Considering Education of Children’s Drawings in the 19<sup>th</sup> century to 20<sup>th</sup> century in England’, 2<sup>nd</sup> International Conference of Art, July 25, 2012, Aveiro University, Portugal.

Mariko Kaname, Remarks on ‘Emptiness’ or ‘Intervals’ in Painting: Modernism and Orientalism” 33<sup>rd</sup> Conference of the International Committee of the History of Arts, July 19, 2012, Nationalmuseum Nurnberg, Germany.

〔図書〕(計 5 件)

久保 恭子他著、山口 恵里子編『ロンドン - アートとテクノロジー - 』, 竹林舎、2014 年 12 月 1 日、512 頁

要 真理子、前田 茂他著、仲間 裕子他編『自然の知覚 風景の構築。グローバル・パースペクティブ』, 三元社、2014、311

要 真理子、稲賀 繁美他著『自然学 | 来るべき美学のために』, ナカニシヤ出版、2014、194

スチュアート・ホール著 / 前田 茂訳『イメージと意味の本 記号を読み解くトレーニングブック』フィルムアート社、2013、200

前田 茂、要 真理子編著『イメージ(下) イメージと私たち』, ナカニシヤ出版、2012 年、126

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

要 真理子 (KANAME, Mariko)  
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・招へい准教授  
研究者番号：40420426

### (2) 研究分担者

前田 茂 (MAEDA, Shigeru)  
京都精華大学・人文学部・准教授  
研究者番号：80368042

大久保 恭子 (OKUBO, Kyoko)  
京都橘大学・人間発達学部・教授  
研究者番号： 70293991